

王ノ壇遺跡

—第5次発掘調査報告書—

2003年7月

仙台市教育委員会

例　　言

1. 本書は、共同住宅建設に先立って行った王ノ壇遺跡第5次発掘調査の報告書である。
2. 図面整理は佐藤甲二・鈴木隆が、出土遺物の整理は平間亮輔が担当した。本書の執筆は鈴木が、また編集は佐藤・鈴木が行った。
3. 出土した陶磁器の産地、年代については仙台市立博物館 佐藤洋氏よりご教示を頂いた。
4. 本調査における出土遺物、図面、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管しているので、活用されたい。

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原)を使用した。
2. 本書中の地形図には国土地理院発行の2万5千分の1「仙台西南部」、「仙台東南部」を合成したものを使用した。
3. 本書使用している方位は真北で統一している。
4. 図中の座標値は、平面座標系Xによっている。
5. 本書中の遺構略号は以下のとおりに表している。

SD : 溝跡	SK : 土坑		
C : 非クロ成形の土師器	E : 須恵器	G : 土師質土器	I : 陶器
J : 磁器	K : 石器・石製品	N : 金属製品	P : 土製品
6. 遺物の登録には、以下の略号を使用した。

C : 非クロ成形の土師器 E : 須恵器 G : 土師質土器 I : 陶器
J : 磁器 K : 石器・石製品 N : 金属製品 P : 土製品

7. 陶磁器の実測図中、中軸線が1点鎖線のものは反転実測したものである。

目　　次

I 遺跡の概要	1
II 第5次調査の概要	1
1. 調査概要	
2. 調査方法	
3. 基本層序	
4. 調査概要	
III 検出遺構と出土遺物	4
1. SK1	
2. SD1	
3. SD2	
4. SD3	
5. SD4	
6. IV層水田跡	
IV まとめ	8

I 遺跡の概要

遺跡は仙台市地下鉄富沢駅の東約800mの太白区大野田に位置し、名取川の支流、荒川の右岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡は東側（旧荒川方面）に下がる緩斜面上にあり、標高は10~11mである。これまで本遺跡では1~4次の調査が行われており、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。昭和63年から平成3年にかけて実施された1次調査では、鎌倉時代頃の武士階級の屋敷跡とそれに隣接する宗教施設の跡、火葬墓、道路跡、区画溝等が検出されている。今回の第5次調査区（★印）は、1次調査I区北半で検出された中世全体区画溝の延長線上に位置している。



第1図 遺跡位置図 (1/25000)

1. 王ノ壇遺跡 2. 王ノ壇古墳 3. 大野田古墳群 4. 大野田遺跡

遺跡周辺には、王ノ壇古墳（2）多数の古墳群及び中世の道路跡が検出された大野田古墳群（3）、多量の縄文土器や土偶が出土した大野田遺跡（4）、また、北側には後期旧石器時代の石器や埋没林に加え、弥生時代から続く複数の水田跡が重層的に検出された富沢遺跡、北東には7世紀代にさかのぼる官衙遺跡である郡山遺跡など、仙台市内でも特に重要な遺跡が複数存在する。なお、王ノ壇遺跡のより詳しい自然及び歴史的環境については、王ノ壇遺跡第1次調査発掘調査報告書に記載があり、これを参照されたい（仙台市教育委員会2000）。

参考文献：仙台市教育委員会（2000）『仙台市 王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」開通遺跡－発掘調査報告書Ⅰ』『仙台市文化財調査報告書第249集』

II 第5次調査の概要

1. 調査要項

遺跡名 王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号01428 仙台市文化財登録番号C-309）

所在地 仙台市太白区大野田字北屋敷21-1、22-1の各一部、19-1、20、37、21-1の地先水路

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）

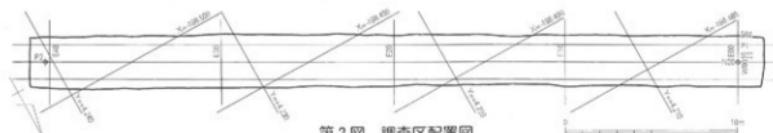
調査担当 調査係主査 佐藤甲二 同主事 鈴木 隆

調査期間 平成15年6月9日～同年6月12日

調査面積 約126m²

2. 調査方法（第2図）

建設予定地に3×42mで、約126m²の調査区を設定した。調査区の両端2ヶ所にP1（西）、P2（東）を設けた。それぞれの平面直角座標系Xにおける座標値は、P1がX=-198.483km、Y=4.205km、P2がX=-198.502km、Y=4.240kmで、2点間の距離は40.246mである。P1とP2を結ぶ東西ラインを基軸線とし、P1を00に、1m間隔で東方向はE01、E02、E03…、西方向はW01、W02、W03…とした。南北方向についても同様に、それぞれS01、S02…、N01、N02…とした。



第2図 調査区配置図

3. 基本層序

調査区内における基本層序はⅠ～VI層である。なお、現地表面直下には調査区全域にわたって0.5～1.2mの盛土層があり、基本層序はその下層より命名したものである。以下、各層の特徴について述べる。

Ⅰ層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト。断続的に分布している。層厚は10～40cmで、上部は部分的に盛土によるかく乱を受けている。下面にはやや起伏が認められる。鉄分の集積は見られない。現代以降の水田土壤である。

Ⅱ層：暗灰褐色（2.5Y4/2）砂質シルト。Ⅰ層と同様、断続的に分布している。層厚は10～20cmである。下面には緩やかな起伏が認められる。鉄分の集積は見られない。近世以降の水田土壤か。

Ⅲ層：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。調査区東側にのみ分布している。層厚は10～20cmである。下面には起伏が認められる。近世以降の水田土壤か。

IV層：灰黄色（2.5Y6/2）シルト。細砂をブロック状に少量含む。Ⅰ、Ⅱ層と同様、断続的に分布している。層厚は10～15cmである。下面には顕著に起伏が認められる。下部に下層ブロックを含む。鉄分の集積は見られない。近世末以降の水田土壤である。

V層：灰オリーブ色（5Y6/2）砂質シルト。調査区西側のみに分布する。層厚は5～10cmと薄い。下面には顕著に起伏が認められる。下層ブロックを含む。鉄分の集積は見られない。近世初頭の水田土壤か。

VI層：黄褐色（2.5Y5/4）砂質シルト。調査区全域に分布する。層厚は50cm以上になるとと考えられる。なお本層は、前述した1次調査における基本層序VI層に対応するものと考えられる。1次調査においては、VI層上面が古代及び古墳時代中期の占墳などの検出面とされている。

ほとんどの遺構が確認されたVI層上面での地形をみると、全体的には西から東にかけて下り傾斜となっており、調査区の東西端では約1.5mの標高差が認められる。また、E11～E12の間に比高差約50cmのやや急な傾斜（以下段差）が確認された。しかしこの部分の傾斜が自然地形を反映したものか、後世の掘削によってつくり出されたものかは不明である。それ以後の基本層もこれらの地形を反映した状態で堆積している。

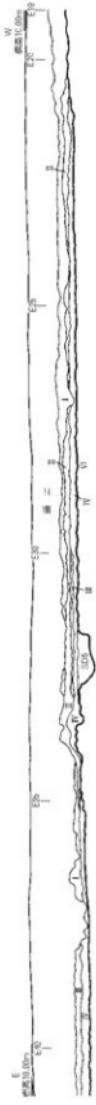
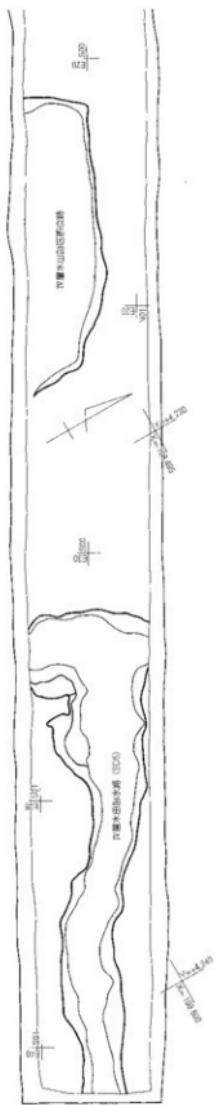
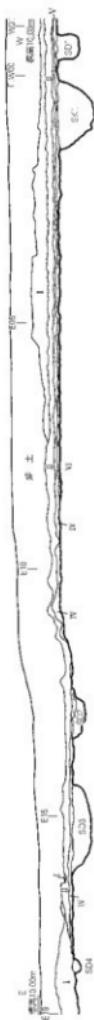
4. 調査概要

平成15年6月9日より作業開始。重機により盛土層及び遺構検出直上面まで掘削を行い、その後は人力による精査を行った。遺構の測量は、後述の基準点P1を利用した簡易造り方によって1/20の遺構全体図を作成し、調査区断面図、遺構断面図についても1/20の実測図を作成した。記録写真については全てデジタルカメラによって行った。平成15年6月12日、全ての作業を終え調査終了。

第5次調査では、土坑1基（SK1）、溝跡4条（SD1～4）、水路跡1期（IV層水路跡及びこれに伴う区画、水路・SD5・）、水路跡1条（SD5）の各遺構が検出された（第3図）。遺構確認面はいずれもVI層上面で、重複関係はない。遺構は最も標高の高い西端にSK1、SD1が位置しており、段差をおりてすぐSD2、SD3、SD4と続く。そしてIV層水路跡、水路跡（SD5）が最も低い東側に位置している。

遺物は175点出土している（表1）。基本層からの出土ではなく、全体の約90%はIV層水路跡の区画及び水路跡（SD5）からの出土である。時期的に古い遺物としては、ビエスエスキュー、四石や非クロの土師器などが挙げられる。出土遺物のほとんどは陶器、磁器である。13～14cの中世陶器、16c、16～17cの陶器、磁器が数点ある他、特に18～19c前半の資料が最も多く出土している。陶器、磁器のほかには、砥石、硯、土人形、古鏡、鐘鉄などが出土している。

0 50 100 m



第3图 调查区透镜配置图·南壁断面图

III 検出遺構と出土遺物

1. SK1 (第4図 図版1-4、5)

E00～E02の間に位置する。平面形は調査区南壁にかけて全体の2/3程が確認されている。上端規模は東西約1.7m、南北約1.3m以上で、深さは約0.7mである。平面形は上端が不整円形、下端は掘りすぎたため不明である。断面形はやや開き気味のU字形を呈する。堆積土は2層から成り、堆積上2層はVI層土とV層上の混合土で人为的に埋められたものである。遺物は埋土2層中より17c初頭頃の、志野産の陶器が1点(1)出土したのみである。

2. SD1 (第4図 図版1-1～3)

W00の西側、調査区の最も西端に位置する。上端幅は約0.5m、深さ約0.5mである。溝幅はほぼ一定で、西側に対しやや内湾する、弧状を呈する。断面形はややオーバーハングしている。底面は部分的に凹凸を有するものの、概ね平坦である。堆積土は4層に分けられるが、基本層序中にはみられない黒色土を含み、VI層以降に堆積した旧表土が堆積したものと考えられる。遺物は堆積土1層中より非ロクロの土器器が2点(2)出土している。

3. SD2 (第4図 図版1-6、8、10)

E12～E14の間に位置する。上端幅0.8～1.1m、深さ約0.3mである。方向はN-22°-Eで、直線的である。上端幅は北側でやや広くなる。断面形は東半部が10cmほど一段浅くなっている。底面は概ね平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、そのうち堆積土3層についてはより古い溝跡のものである可能性もある。しかし、他の堆積土との間に、異なる遺構とするだけの土層の違いが見られないことから、可能性を指摘するに止めた。遺物は堆積土2層中より、四石1点(3)、石製品2点が出土している。

4. SD3 (第4図 図版1-6、7、11)

E14～E16の間に位置する。上端幅約1.5～1.7m、深さ約0.4mである。方向はN-29°-Eで直線的である。溝幅は北側で若干狭くなる。断面形は開いたU字形で壁も緩やかに立ち上がる。堆積土は2層から成り、下層は粘質土で上層は粗砂をラミナ状に多量含む。遺物は出土していない。

5. SD4 (第4図 図版1-9)

ほぼE18のライン上に位置する。上端幅約0.3～0.4m、深さ約0.2mである。方向はN-26°-Eで直線的である。溝幅は南北両端部でやや狭くなる。断面形はU字形である。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりはSD2と同様やや急である。堆積土は2層に分けられ、下層にはVI層土が混入する。遺物は出土していない。

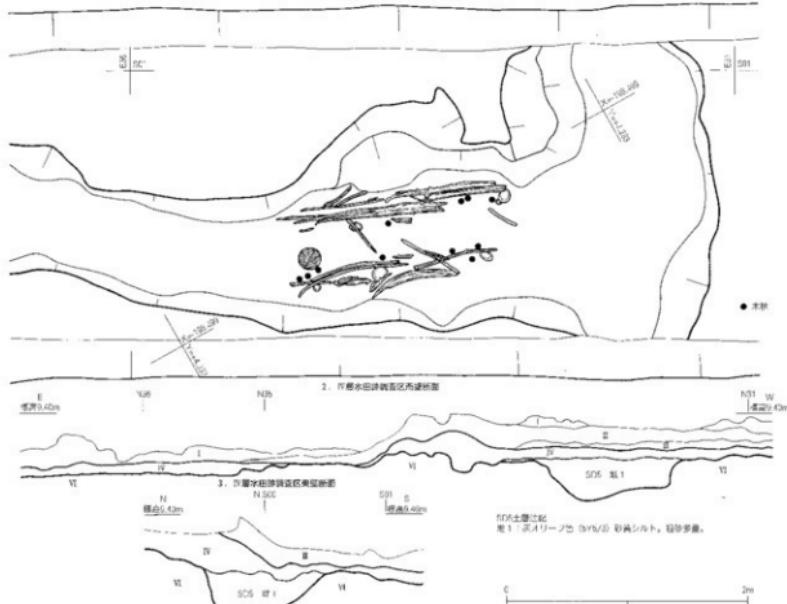
6. IV層水田跡 (第3、5、6図 図版2-12～17)

調査区全域に耕作土の広がりが認められた。水田上面は、上層のかく乱による削平を受けており、残存状況は悪い。上面の標高は9m前後で、東側への緩やかな下り傾斜を示す。調査区東半で、水田区画の痕跡が1区画と水路(SD5)が検出されたが、畔は調査開始時の重機による掘削のため、平面的に確認することができなかった。耕作土は灰黄色(2.5Y6/2)シルト(基本層IV層)で層厚は平均約10cmである。下面は起伏が顕著で、下層を巻き上げたブロックが少量認められるが、鉄分の集積は見られない。なお、当水田跡は水路が付いた段階(古期)、これを埋めた段階(新期)の2時期の変遷が認められた。

＜畔＞ 畔は調査区南壁・東壁・北壁の断面観察により、新期の段階のもので確認されている。南北水路の東側に幅約50cmで約20cmの高まり(第5図-2)、東西水路上から北側に幅1m以上で30cm以上の高まり(第5図-3)を持つものである。直下層のVI層上面には、擬似畔Bが形成されている。また、II層段階も同様の盛り上がりが認められ、畔の踏跡が観察される。

＜区画＞ 区画の痕跡として確認された。E20～E27の間に位置し、VI層の内部として検出されている。方形区画で、規模は東西約6.0m(N-121°-E)、南北1.7m以上である。また区画内東半部のVI層上面において、馬か牛

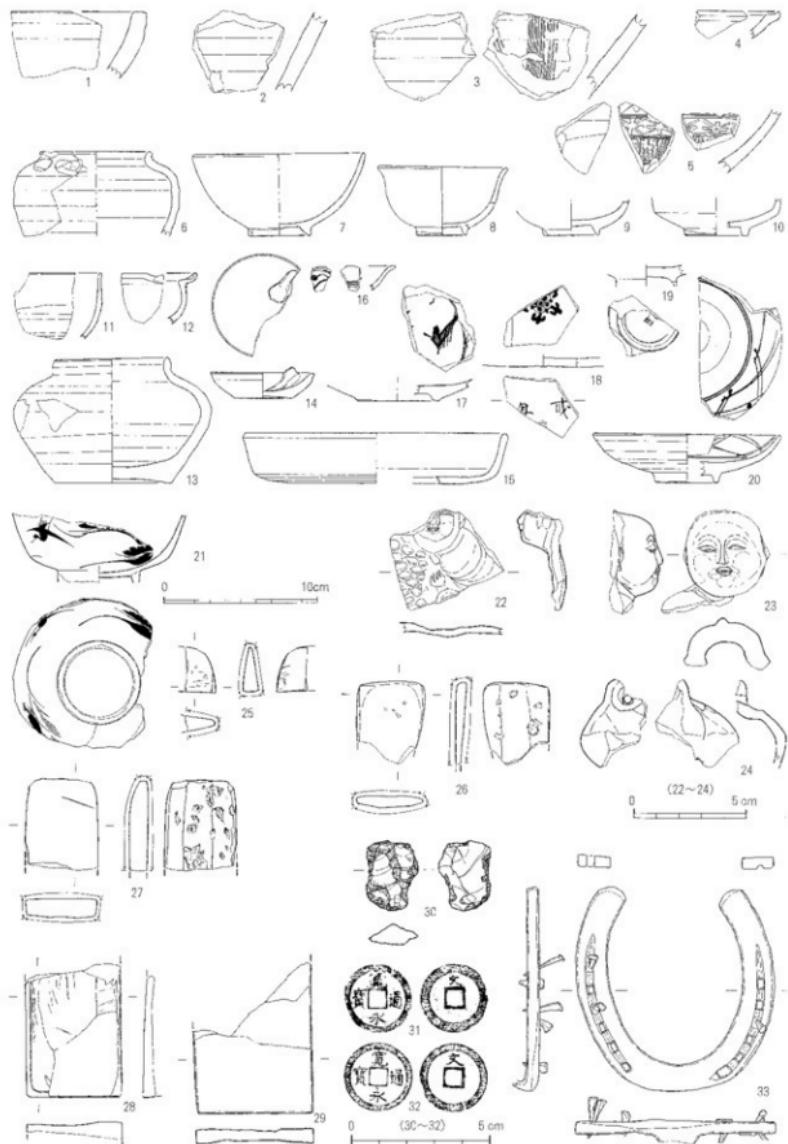
1. IV層水田跡断面 (SDS) 水田跡断面図



第5図 IV層水田跡平・断面図

IV層水田跡出土遺物調査表

No.	地名	山名	地質	遺物	種類	形状	大きさ	位置(cm)	延長(cm)	高さ(cm)	成形	製作年代	表面	内面	特徴、備考	出土地号
1	I-15	SDS	冲積	陶器	罐	口部鋸歯	不明	不明	不明	不明	直筒	10~14c	ロクロ口、直筒	クロロ口、直筒	直筒	段級 3-1
2	I-14	NIS	冲積	陶器	杯	無縫破裂片	不明	不明	不明	不明	直筒	10~14c	ナガリ口、直筒	ナガリ口、直筒	直筒	段級 3-2
3	I-13	SDS	冲積	陶器	盤	無縫破裂片	不明	不明	不明	不明	直筒	10~14c	ナガリ口、直筒	ナガリ口、直筒	直筒	段級 3-3
4	I-5	SDS	冲積	陶器	盆	直縁直腹	1.5~4	不明	不明	不明	直筒	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-4
5	I-10	SDS	冲積	陶器	人形	堆積物片	不明	不明	不明	不明	直筒	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-5
6	I-11	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	7.4	4.6	4.6	4.6	直筒	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-6
7	I-4	SDS	冲積	陶器	罐	口一部鋸歯	1.4	4.1	5.5	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-7	
8	I-5	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	8.8	3.4	4.6	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-8	
9	I-6	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	1.3	不明	3.7	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-9	
10	I-7	東川底面	冲積	陶器	罐	直縁直腹	1.5	不明	4.3	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-10	
11	I-9	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	不明	不明	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-11	
12	I-8	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.6	8.9	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-12	
13	I-2	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	5.0	7.3	5.4	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-13	
14	I-1	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	6.8	3.8	1.7	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-14
15	I-12	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	15.6	14.0	3.4	相馬?	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-15
16	J-5	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	6.0	6.0	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-16
17	J-3	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	5.5	不明	相馬	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-17	
18	J-2	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	6.0	6.0	6.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-18
19	J-4	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	6.0	6.0	6.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-19
20	J-1	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	7.5	5.7	3.0	相馬?	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-20
21	J-2	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	5.7	5.7	3.0	相馬?	10c	直筒	直筒	直筒	段級 3-21
22	K-1	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-22
23	K-2	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-23
24	K-3	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-24
25	K-4	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-25
26	K-5	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-26
27	K-6	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-27
28	K-7	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-28
29	K-8	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-29
30	K-9	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-30
31	K-10	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-31
32	K-11	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-32
33	K-12	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-33
34	K-13	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-34
35	K-14	SDS	冲積	陶器	罐	直縁直腹	口一部鋸歯	4.0	4.0	4.0	相馬?	10~14c	直筒	直筒	直筒	段級 3-35



第6図 IV層水田跡出土遺物

と考えられる動物の足跡が1列確認された。

<水路跡（SD5）> 水路は古期に伴うもので、新期の耕作土を振り上げた段階で、E31ラインから調査区の東壁にかけて検出された。E32ラインではほぼ直角にT字状に交わる東西水路（N=121°-E）と南北水路からなり、東西水路はやや蛇行している。幅は、東西水路では0.8~1.2m、南北水路では約1.2mである。深さは0.2~0.3mである。断面形はU字形を呈するが、底面には凹凸が顕著である。壁は比較的急に立ち上がり、一部は水流の影響で壁がえぐられオーバーハングしている。堆積土は1層のみで部分的に多量の砂を含む。

東西水路内E32~E35の位置で、2本の杭列と長さ1m前後の自然木10数本を組み合わせた水利施設が検出された。大きさは南北約0.8m、東西約2mで、東西水路に対し長軸がほぼ平行するよう設置されている。製作手順をみると、まず杭を2列設置した後、同列内の杭間に径10~20cmの川原石を配し、その上に自然木を組み合わせている。

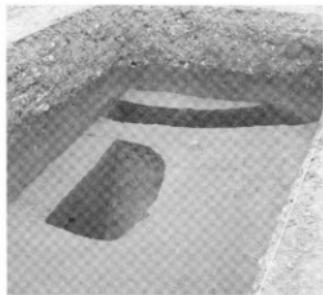
<遺物> 区画からは肥前産磁器、相馬産陶器、踏鉄などが出土している。また水路内からは163点の遺物が出土した。17~19c前半の陶器・磁器が多数を占め、特に18cのものが多い。肥前産磁器、相馬産陶器が多く、他に小野相馬窯、大野相馬窯、美濃窯、唐津窯、堤窯、岸窯系の陶器が出土している。漆器や砥石、硯、土人形、古錢なども出土しており、同様の年代と考えられる。また中国産磁器、瀬戸美濃産陶器など16c代に遡る資料が各1点見られる。他に中世陶器が3点出土している。

IV まとめ

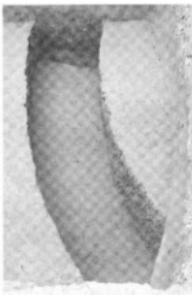
- 王ノ塙遺跡5次調査では、土坑1基、溝跡4条、IV層水田跡が検出された。検出面は全てVI層上面である。
- 基本層の内、I・II層は水田耕作土である。またIII・V層も土質及び層相より水田耕作土である可能性が高い。
- 遺構の年代については、SK1が16c末から17c初頭、SD1は古墳時代まで遡る可能性も考えられるが、断定はできない。SD2~4については、古墳時代から近世の間に位置付けられるが、1次調査1区から検出された中世における全体区画溝の延長方向に位置しており、これらに対応する可能性が高い。特にSD3については、下層に粘土層、上層に砂層という堆積状況が区画溝に類似する。IV層水田跡については、水田の有無により2時期の変遷が認められた。水路の取り付く占段階のものは16c以降につくられ19c前半頃には埋没したものと考えられる。新段階のものは幕末頃に形成されたものと思われる。なお耕作土のみ検出のII層水田跡は、明治以降のものである。
- 水路跡から検出された水利施設については、T字形水路の合流部分に設置されている点や、杭、自然木が水路の長軸に沿って配置されている点から、井堰であった可能性を指摘したい。
- 遺物の多くは16~19c前半を中心としたものである（表2）。特に18~19cに集中し、相馬窯、堤窯の陶器が多い。器種は碗、鍋、灯明皿等が出土している。他に16c瀬戸美濃窯、16c末~17c初頭志野窯の陶器が各1点出土している。磁器は陶器に比べ年代が古く、17~18cの肥前窯が多数を占める。4点中3点が皿である。他に16c中国産の端反皿が1点出土している。
- 他の遺物としては、漆器の碗、砥石、硯、土人形、古錢などがみられる。これらはいずれも水路内より出土しており、他の共伴遺物より18~19cに属する可能性が高い。
- また13~14cの中世陶器が3点出土しており、器種は擂鉢、鉢で、白石窯産など在地のものがみられる。他にはビエスエスキュー、四石、非ロクロの土師器等が出土している。

表1 出土遺物数量表

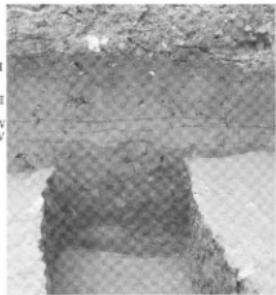
遺構名	層位	十細目	底敷	土質	土質	瓦	瓦	陶器	器	片石器	石器	石製品	木製品	土製品	金屬製品	古物	合計	
SK1	地2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
SD1	地1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
SD2	地2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
IV層水田跡	作上	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	
	水路跡	堆	1	3	1	-	-	1	50	6	-	-	-	-	-	-	4	75
	底敷	1	-	1	1	1	-	61	13	1	-	-	-	-	-	-	1	88
総計	-	-	4	4	2	1	1	116	19	1	1	10	2	11	1	2	175	



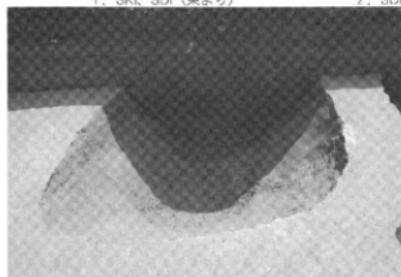
1. SK1、SD1 (東より)



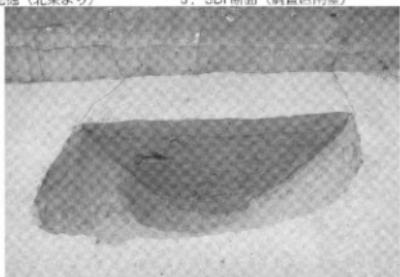
2. SD1 完掘 (北東より)



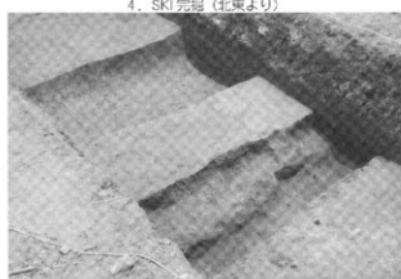
3. SD1 断面 (調査区南壁)



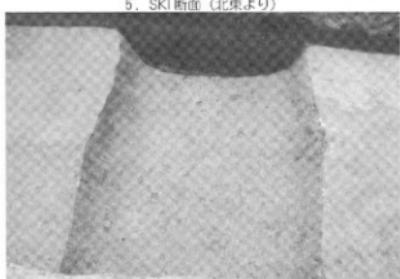
4. SK1 完掘 (北東より)



5. SK1 断面 (北東より)



6. SD2・3完掘 (北より)



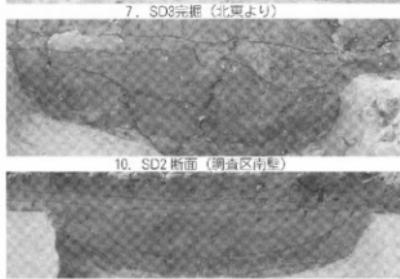
7. SD3完掘 (北東より)



8. SD2 完掘 (北東より)



9. SD4 完掘 (北東より)



10. SD2 断面 (調査区南壁)

11. SD3 断面 (調査区南壁)

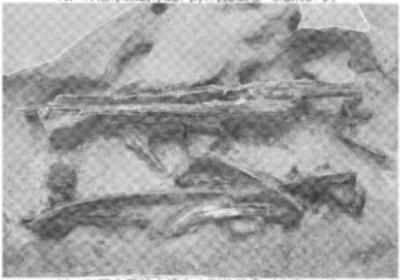
図版 1 検出構造 1



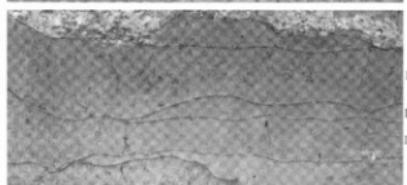
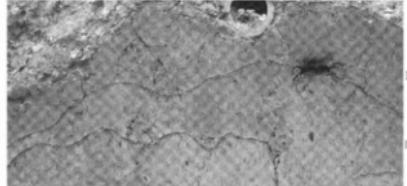
12. IV層水路跡水路内出土物出土状況（南東より）



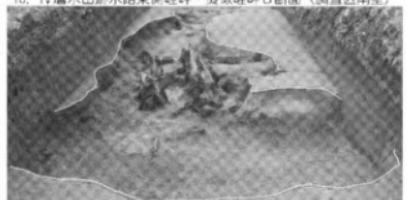
13. IV層水田跡水路内水利施設①（北東より）



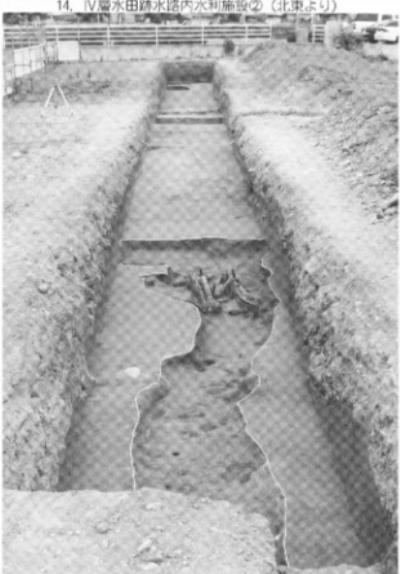
14. IV層水田跡水路内水利施設②（北東より）



15. IV層水田跡水路東側鞋群・擬似蚌群B断面（調査区南壁）



16. IV層水田跡水路及び水利施設（南東より）



17. 完掘全景（南東より）

図版2 検出遺構2



1～15：陶器 16～20：磁器 21・22：土人形 23：土鈴 24： tesserae 25：ビエスエスキー 26：石 27～31：石製品 32：鉄鉋 33・34：古錢
図版3 出土遺物

表2 王ノ塙遺跡第5次調査IV層水田跡出土陶器・磁器産地別年代別表

产地 年代	白石窯	在地	中国 磁器	肥前 美濃	瀬戸 美濃	志野	美濃	岸窯系	唐津	相馬	小野 村馬	大野 相馬	堤	堤?	不明	計	
13~14c	1	1														1	3
16c		1		1												2	
16~17c					1*											1	
17c			1					2								3	
17~18c			6					2								8	
18c			6			1			29		1	1				38	
18~19c										1					1	2	
19c										1				3	1	5	
不明			1		1				1	12			1	1		17	
計	1	1	14	1	2	1	2	3	43	1	1	4	3	1		79	

*この1点のみSK1出土。他は全てIV層水田跡出土。

報告書抄録

ふりがな	おうのだんいせき						
書名	王ノ塙遺跡						
副書名	第5次発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第268集						
編著者名	佐藤甲二・鈴木隆						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL022-214-8893~8894						
発行年月日	2003年7月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遭跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おうのだんいせき 王ノ塙遺跡第5次	仙台市太白区 大野田 字北屋敷	04100	01428	38° 12' 50"	140° 52' 40"	20030609 ~ 20030612	126 m ² 共同 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
王ノ塙遺跡	水田跡	近世	1,坑 溝跡 水田跡	土師器 須恵器 陶器・磁器 石器・石製品 金属製品 木製品			

仙台市文化財調査報告書第268集
王ノ壇遺跡
—第5次発掘調査報告書—

2003年7月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8893-4

印刷 有限会社 サニーデンタルサプライ
仙台市泉区七北田字町20-1
TEL 372-6810
